

アジアの日本語幼稚園に通う幼児の異文化体験と異文化適応

首 藤 敏 元 埼玉大学教育学部
近 藤 茜 埼玉大学教育学部
伊多波 美 奈 町田保育福祉専門学校

キーワード：日本語幼稚園、異文化体験、異文化適応、異文化感情、帰国子女教育

問題と目的

外務省（2016）によると海外に居住する邦人数は2016年の時点で130万を越えており、27年間で2.5倍に増加した。地域別では、北米が変わらずトップを占めているものの、この11年間でアジアにおける長期滞在者の増加が著しく、全体の約3割を占めている。この統計は、親と共に海外で暮らす子どもたちが増加していることも示している。

海外での長期滞在者の多くは、海外に進出している企業に所属する会社員であり、数年間の任期終了後には帰国することがほとんどである。このような帰国を前提とする海外駐在員の家族にとって、いずれ日本で義務教育、もしくは高等教育を受ける子どもたちの、現地での教育は大きな関心事である。親の希望は、海外と日本国内の教育が連続することであろう。そのため、日本人の多く住む都市には、日本の義務教育を受ける子どものために日本人学校が設置されている。2012年の時点で、アジア地域の日本人学校に通う子どもの割合は6割にも達している。また現地の日本人会が主体となり、現地校やインターナショナルスクールに通う子どもたちのために、補習授業校が用意されている。一方、就学前の幼児には帰国を前提とした日本式の教育機関は、義務教育ではないため公的には用意されていない。そのため、日本の学校法人が、NGOや現地の学校法人と共同して、私立の日本語幼稚園を設置する動きが広がっている（森下、2008）。帰国後、子どもたちがスムーズに日本の学校教育に適応できるように、現地の幼稚園は教師、教育方法、教育環境を整えていく必要がある。

また、現地の日本人学校等に通う子どもたちは将来の日本社会にとって宝でもある。つまり、子どもたちは帰国後に自らの異文化体験を活かすことができれば、日本の学校生活を送ってきた子どもたちにも新しいものの考え方や行動スタイル等を伝えることができ、日本の学校教育の共生社会化に寄与することができる。そのためにも、一時的に海外で暮らす子どもたちが日本式の教育を受けることができるようにするとともに、異文化の体験をし、それに適応できるような支援策を用意する必要がある（佐藤、1991）。そのために、海外で暮らす幼児を育てる家庭と日本人幼児向けの幼稚園を支援するために、現地で幼児がどのような異文化体験をし、どのようなプロセスで異文化に適応するのかについて、基礎資料を収集する必要がある。そこで、本研究は、日本人駐在員が急増するアジア地域、特にバンコクと上海に焦点を当て、海外駐在員家庭の子育て支援策を探り、日本語幼稚園の教育内容を定めるための資料を提供するために、幼児の異文化体験と異文化適応に関する調査を実施することにした。

わが国においても、国際理解、異文化教育、異文化適応に関する研究は少なからず行われてきた（例えば、向井・渡部、2006；沼田、2012；大西、2001）。しかしそれらの多くは、日本の大学

で学ぶ留学生の教育と適応に関するものであり（丸井、2012；中柴、1997；植松、2010；山本、2001）、大学生や社会人を対象にした研究が多い。これらの研究によると、異文化適応は、その期間の長さ、言語や宗教の影響を受けるとともに、自己の変容、さらにはアイデンティティの変容をももたらす経験になる（花木、2008；北端、2007；丸井、2012；鶴田・小川、1985；植松、2010）。最近では、異文化体験と適応を質問紙法からとらえるだけでなく、語りやライフ・ストーリーの手法を用いる動きも出てきた（ビアルケ、2006；原、1993、1998；奥村、2005）。

本研究と関連の深いものとして、北端（2007）はインドネシアに滞在する日本人駐在員を対象に調査をし、イスラム社会に帰因すると思われる異文化適応の難しさや親日国に由来する適応の容易さについて示唆を与えている。中村ら（1994）は在日朝鮮学校に通う中学生の日本社会への適応を調査し、長く日本に生活している子どもたちであっても異文化体験を意識化する機会の多いことを示した。子どもたちにとって最も身近な人間関係である家族の考え方、家族を取り巻くコミュニティのあり方が子どもたちの異文化の意識化や適応に影響していると考えられる。

本研究は、バンコクと上海の日本語幼稚園に通う子どもたちの保護者を対象に調査を行い、幼児の異文化体験と異文化感情、及び保護者の関わり方と幼児の異文化適応に関する調査を実施する。本研究の理論的根拠は、Turielら（Turiel, 2002；Wainryb, 2006）の認知・社会的構築主義である。異文化での生活上の差違は社会的慣習の違いであり、その背景には歴史的文化的な意味がある。幼児は異文化差違体験を、身近な他者との相互作用を通して、慣習上の違いであると自ら意味づけを行い、異文化への積極的な志向性を形成すると考えられる。したがって、本研究は次の作業仮説を設定した。即ち、幼児の異文化差違体験は、親のかかわり方を通して、positiveな異文化感情を形成し、異文化適応を促すであろう。

方 法

（1）参加者

バンコクと上海にあるオイスカ日本語幼稚園、合計4園に在籍する3歳から6歳の幼児360名（平均年齢 4歳10カ月、男子211名 女子149名）の保護者が調査に協力した。オイスカ日本語幼稚園とは、NGOオイスカと日本の私立幼稚園とが連携して、アジア地区に開設した私立幼稚園である。最初の園は香港にある。オイスカ幼稚園の教育内容と方法は日本の幼稚園に合わせており、担任教師のほとんどは日本人であり、日本語で保育を行っている。オイスカ日本語幼稚園は現地の教育行政から幼稚園としての正式な認可を受けている。

（2）質問項目

A. 子どもの異文化体験

箕浦（2003）、沼田（2012）及び植松（2010）の異文化体験と異文化受容に関する研究を参考にして、幼児の異文化体験に関する質問項目を作成した。質問は、現地の文化との接触（「現地の人の集まるレストランで食事をする。」「現地で知り合った現地の人の家に行く。」など）、及び現地での日本文化との接触（「日本人が多く利用するスーパーマーケットに行く。」「日本語の本や絵本を読む（タブレット端末を含む）。」など）に関する18項目であった（表2参照）。各項目について、0「まったくない」、1「あまりないがゼロではない」、2「少ないがある」、3「ときどきある」、4「よくある」、5「毎日ある」の6段階で回答を求めた。

B. 異文化差違体験と異文化感情

現地での異文化体験を引き起こすと考えられる項目を10個（「現地の言葉や文字」「現地の人の生活の様子」「現地の街の匂いや音」など）新規に作成し、それぞれについて幼児が「日本での生活や日本人と違う」という言動を見せた程度を質問した（Appendix C～Appendix F参照）。回答様式はA「異文化体験」と同様の6段階であった。

異文化感情は異文化差違体験と同様の項目を用いて、幼児の「違う」という言動がプラスなのかマイナスなのかについて質問した。保護者はそれぞれの項目について、0「『違い』を見せたことはない」、1「マイナス（きたない、イヤだ、日本の方がいい等）がほとんど」、2「どちらかというとマイナスが多い」、3「両方同じぐらい」、4「どちらかというとプラス（すごい、カッコいい、かわいい等）が多い」、5「プラスがほとんど」の6段階で回答した。

C. 幼児の異文化差違体験時の親の関わり方

向井・渡部（2006）と泉水・小池（2012）による異文化受容態度の尺度を参考にして、表3に示す12項目を作成した。回答は0「まったくない」、1「あまりないがゼロではない」、2「少ないがある」、3「ときどきある」、4「よくある」、5「いつもそうだ」の6段階であった。

D. 幼児の異文化適応

Bennett（1993）の異文化感受性の発達モデルを参考にして、表4に示す12項目を作成した。それぞれについて、1「まったく当てはまらない」、2「どちらかといえば当てはまらない」、3「どちらともいえない」、4「どちらかといえば当てはまる」、5「よく当てはまる」の5段階で回答を求めた。

(3) 手続き

調査は2013年7月と9月に実施された。質問紙は幼児を通して家庭に配布され、1週間後に回収された。回収率は85%であった。

結 果

1. 海外で暮らす幼児のプロフィール

幼児の65%が2名きょうだいであり、20%が一人っ子であった。一人親家庭の幼児は3%、98%が核家族であった。子どもの現地滞在期間の平均は2年であった。3歳、4歳、5歳の年齢別に、滞在期間1年未満、1年以上2年未満、2年以上の3群を設定した。人数の内訳は表1に示されている。平日の外遊びと屋内遊びの時間はどちらも約90分であり、年齢と滞在期間による差は認められなかった。

表1 調査対象となった幼児の年齢と滞在期間(N)

年齢	滞在期間			合計
	1年未満	1-2年	2年以上	
3歳児	39	46	52	137
4歳児	24	39	48	111
5歳児	27	43	42	112
Toal	90	128	142	360

2. 幼児の異文化体験

子どもの日常生活での文化的体験に関する18項目を因子分析（最小自乗法、プロマックス回転）し、4因子を抽出した。第1因子は現地の象徴文化に触れたり現地の友人宅を訪問したりする「深い」異文化体験、第2因子は現地の観光地を訪れたり現地の交通手段を利用したりする「表面的」

異文化体験、第3因子は「日本人コミュニティ」での経験、第4因子は「日本語のメディア」の視聴に関する項目に高く負荷していた。最初の2つの因子は異文化体験、後の2つの因子は異文化環境下における自文化体験といえる（表2）。

各因子に高く負荷している項目の合計値を項目数で割った得点を尺度得点とし、それぞれについて、3（年齢）×3（滞在期間）の分散分析を実施した。その結果、「深い」異文化体験（ $F_{(2, 347)}=13.48, p<.01$ ）と「表面的」異文化体験（ $F_{(2, 348)}=3.04, p<.05$ ）、そして「日本人コミュニティ」体験（ $F_{(2, 347)}=6.72, p<.01$ ）について、滞在期間の主効果が有意であった。すべての分析において、年齢の主効果と交互作用効果は有意にならなかった。図1に示されているように、全体的に幼児の異文化体験の低さが際立っている一方で、幼児は異文化においても自文化に触れる機会を多くもっていた。「深い」と「表面的」な異文化体験では、2年以上滞在している幼児の方が他の群よりも有意に多くの体験をもっていた。

なお、項目ごとの度数表はAppendix A（上海）とAppendix B（バンコク）に示されている。

表2 異文化体験の因子分析結果（N=349）

			因子分析				
	M	SD	因子1	因子2	因子3	因子4	共通性
⑪現地の言葉で会話をする	1.65	1.470	.825	-.136	-.012	.069	.550
⑩現地の言葉で書かれた本や絵本を読む。	.87	1.202	.798	-.047	-.008	-.039	.607
⑤現地で知り合った現地の人の家に行く。	.58	1.079	.731	-.070	-.017	-.055	.500
⑥現地の子どもと一緒に遊ぶ。	1.15	1.250	.601	.185	.014	.067	.517
⑨自宅で現地のテレビ番組を見る。	.95	1.355	.525	.115	-.057	-.164	.436
⑧現地の子どもも通う習いごとに行く。	.90	1.451	.385	.038	.147	.110	.180
①現地の人が通うスーパーマーケットに行く。	2.44	1.278	.001	.712	-.072	-.001	.512
②現地の人の集まるレストランで食事をする。	2.62	1.179	-.008	.682	-.089	-.012	.465
⑦現地の電車やバスに乗る。	2.95	1.176	-.170	.604	.057	-.015	.276
③現地の人の集まる公園に行く。	2.45	1.361	.171	.559	-.014	.108	.460
④現地の遊園地などのレジャー施設に行く。	2.03	1.181	.292	.418	.157	-.068	.429
⑫日本人が多く利用するスーパーマーケットに行く。	3.68	.816	-.105	.077	.740	-.035	.562
⑬日本人が多く利用するレストランで食事をする。	3.57	.734	.015	-.057	.740	.006	.547
⑭日本人の集まる会合やパーティーに出る。	1.95	1.333	.210	-.078	.299	.066	.113
⑯日本語の本や絵本を読む(タブレット端末を含む)。	4.52	.668	-.040	.017	-.058	.738	.536
⑮日本のアニメのビデオやDVDを見る(タブレット端末を含む)。	4.21	.883	.035	.001	.089	.514	.291
因子間相関							
			因子1	因子2	因子3	因子4	
因子1ー深い異文化体験			1.000	.603	-.128	-.183	
因子2ー表面的異文化体験			.603	1.000	.019	-.013	
因子3ー日本人コミュニティ体験			-.128	.019	1.000	.273	
因子4ー日本語メディア接触			-.183	-.013	.273	1.000	

3. 幼児の異文化差違体験と異文化感情

異文化差違体験に関する10項目は一因子構造であったため、10項目の評定値の平均値を尺度得点とした。全体の平均値は1.77（SD=1.07）であり、幼児の異文化差違体験は多く見積もっても「少ないがある」程度であった。3×3の分散分析の結果、年齢の主効果のみ有意となった（ $F_{(2, 337)}=17.11, p<.01$ ）。5歳児（ $M=2.25, SD=0.96$ ）は3歳児（ $M=1.46, SD=1.06$ ）と4歳児（ $M=1.70, SD=1.03$ ）よりも異文化差違体験を多く経験していた。

異文化感情の分析にあたり、「違いを見せたことはない」の選択を除外し、「マイナスがほとんど」を-2、「どちらかというとなマイナスが多い」を-1、「両方同じくらい」を0、「どちらかという

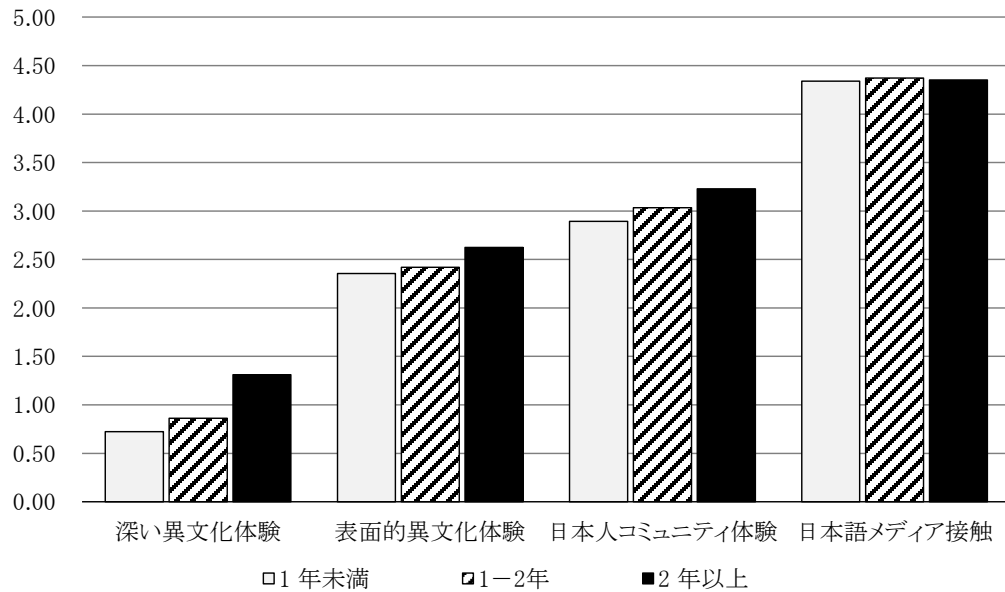


図1 バンコクと上海に住む日本人幼児の文化体験

とプラスが多い」を+1、「プラスがほとんど」を+2と得点化した。因子分析の結果、一因子構造であったため、10項目の評定値の平均値を尺度得点とした。全体の平均値は-1.16 ($SD=1.01$)であり、幼児の異文化感情はnegativeであった。3×3の分散分析の結果、年齢の主効果 ($F_{(2, 329)}=7.49, p<.01$) と年齢×滞在期間の交互作用効果 ($F_{(4, 329)}=3.45, p<.01$) が有意であった。図2に示されているように、多重比較の結果、positiveな異文化感情は4歳≒5歳児>3歳児であった。交互作用効果についてみると、滞在期間が1年未満の場合、異文化感情に年齢差は認められなかった。しかし、1年以上2年未満の場合、4歳児と5歳児の感情は3歳児よりもpositiveな方向に有意に変化していた。滞在が2年以上の場合、4歳児は3歳児よりも有意にpositiveであるものの、5歳児は4歳児よりも有意にnegativeであった。

項目ごとの度数表はAppendix C～Appendix Fに示されている。

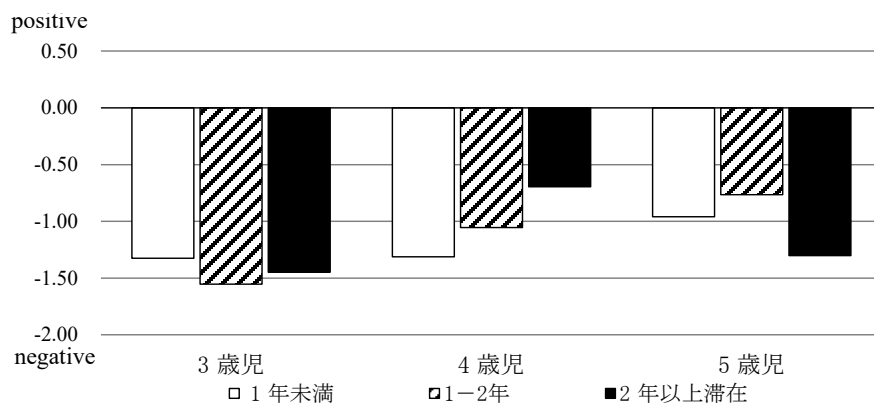


図2 バンコクと上海に住む日本人幼児の異文化感情

4. 幼児の異文化差違体験時の親の関わり方

12項目について因子分析（最小自乗法、プロマックス回転）を実施し、共感的・積極的対応、

抑制回避的対応、自文化中心的対応の3つの因子を抽出した（表3）。尺度項目の平均値を求め、 3×3 の分散分析を行った結果、共感的・積極的（ $F_{(2, 311)}=9.70, p<.01$ ）と抑制回避的（ $F_{(2, 311)}=3.78, p<.05$ ）では年齢の主効果が有意となった。図3に示されているように、全体としては共感的・積極的対応が高い。また、共感的・積極的対応と抑制回避的対応は、どちらも幼児の年齢と

表3 子どもの異文化差異体験時の親の関わり方（N=316）

	M	SD	因子分析			
			因子1	因子2	因子3	共通性
②お子様が「違う」と反応する事柄に積極的な関心を示す。	2.60	1.375	.898	-.214	.114	.689
①「すごいね」「不思議だね」というプラス反応を見せる。	2.82	1.341	.864	-.128	-.026	.661
③「違う国だから違って当然」という主旨の言葉かけをする。	2.59	1.612	.533	.158	.184	.531
⑨お子様が「違う」と反応する事柄の歴史的、地理的、文化的意味を教える。	1.74	1.466	.485	.178	-.049	.401
⑩お子様が「違う」と反応する事柄を自分たちもTRYしてみる（食べてみる、同じ行動をしてる、同じような服を着てみる）	1.23	1.327	.467	.291	-.299	.459
⑧我慢するように言う。	1.15	1.198	-.163	.764	.134	.588
④「気にしないように」という主旨の言葉かけをする。	1.77	1.410	.073	.602	.106	.544
⑦「早く慣れるといいね」という主旨の言葉かけをする。	1.26	1.346	.065	.599	.012	.441
⑥お子様が「違う」と反応する事柄から避けようとする。	.54	.913	-.130	.539	.116	.299
⑪「日本でも同じことがある」という主旨の言葉かけをする。	1.92	1.359	.389	.414	-.084	.489
⑤「変だね」「イヤだね」というマイナスの反応を見せる。	1.49	1.256	.007	.101	.751	.647
⑫「日本（人）はいいね」という主旨の発言をする。	1.66	1.313	.116	.263	.415	.437
因子間相関						
因子1－共感的・積極的対応			1.000	.500	.132	
因子2－抑制回避的対応			.500	1.000	.382	
因子3－自文化中心的対応			.132	.382	1.000	

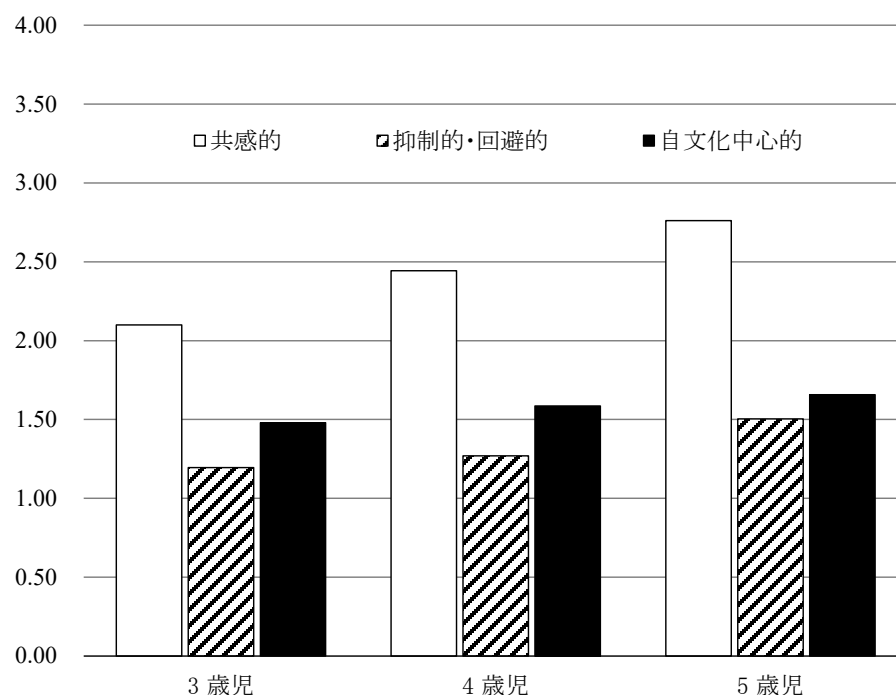


図3 子どもの異文化差異体験時の親の関わり方

共に強くなっていた。なお、項目ごとの度数表はAppendix GとAppendix Hに示されている。

5. 幼児の異文化適応

12項目について因子分析（最小自乗法、プロマックス回転）した結果、現地の文化と生活に積極的に関心を示す「異文化志向」と、現地文化との接触を避けようとする「自文化志向」の2つの因子を抽出できた（表4）。尺度項目の平均値を求め、 3×3 の分散分析を行った。その結果、異文化志向では年齢×滞在期間の交互作用効果（ $F_{(4, 343)}=2.64, p<.05$ ）が有意であり、3歳児においてのみ滞在期間の単純主効果が有意となった。つまり、滞在期間が1年以上2年未満の3歳児よりも、2年以上滞在している3歳児の方が現地文化に積極的な志向性を示していた。

自文化志向では、年齢（ $F_{(2, 346)}=12.03, p<.01$ ）、滞在期間（ $F_{(2, 346)}=7.05, p<.01$ ）の主効果、及び交互作用効果（ $F_{(4, 346)}=2.62, p<.05$ ）が有意となった。図4に示されているように、4歳児と5

表4 子どもの異文化適応に関する因子分析結果 N=355

	M	SD	因子分析		
			因子1	因子2	共通性
⑧現地のことをいろいろ質問する。	2.65	1.264	.782	.189	.634
⑩現地の子どもを友達にもちたがる。	1.77	1.044	.749	-.007	.562
⑨家族から現地での仕事や現地の人のことを聞いたがる。	2.10	1.087	.741	.203	.578
⑦現地のいろいろな場所に行きたがる。	2.78	1.272	.677	-.183	.503
⑤現地のテレビ番組を見たがる。	1.79	1.127	.614	.008	.377
⑥現地の食べ物に興味を示す。	2.61	1.238	.594	-.066	.360
④現地の子どもの遊びに関心を示す。	2.68	1.229	.584	-.247	.413
③現地の文字に興味をもつ。	2.48	1.196	.511	-.024	.262
②現地の言葉(会話)に興味をもつ。	3.67	1.053	.488	-.084	.249
⑪この地に住んでいることを自慢したがる。	1.84	1.034	.410	.121	.178
⑫屋外に出たがらない。	1.62	.956	-.049	.493	.248
⑬「日本に帰りたい」「日本はよかった」と言う。	2.50	1.368	.038	.487	.237
因子間相関					
因子1－異文化志向性			1.000	-.042	
因子2－自文化志向性			-.042	1.000	

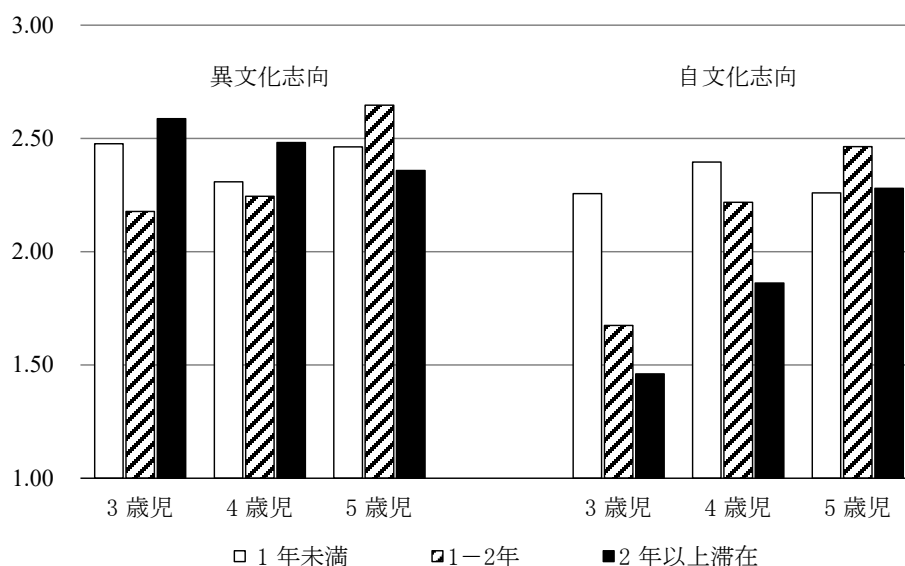


図4 バンコクと上海でくらす幼児の異文化適用

幼児は3歳児よりも自文化志向を強く示した。また、2年以上滞在する幼児は滞在期間1年未満と1年以上2年未満の幼児よりも自文化志向的ではなかった。単純主効果の検定の結果、3歳児と4歳児では、滞在期間が長いほど自文化志向は弱くなったものの、5歳児ではその傾向は認められなかった（図4）。なお、項目ごとの度数表はAppendix IとAppendix Jに示されている。

6. 幼児の異文化適応と異文化差違体験、異文化感情、親の関わり方との関連

幼児の異文化適応を目的変数とした重回帰分析を行うために、異文化適応得点と異文化体験、親の関わり方、異文化感情との相関関係を検討した。図5に示されているように、幼児の異文化体験は深い体験と表面的体験の両方が、また親の共感・積極的対応と抑制回避的対応の両方が、幼児の異文化志向とプラスに関連していた。また、positiveな異文化感情は異文化志向と有意に相関していた。幼児の自文化志向には、単なる異文化体験よりも、そこでの差違体験がプラスに相関していた。また親の自文化志向的対応との間にプラスの有意な相関が認められた。

幼児の異文化志向を目的変数とした段階的重回帰分析が実施された。表5に示されているように、model2からmodel4までの R^2 値は有意に増加しており、各modelの R^2 も有意であった。作業仮説と一致して、異文化体験と親の関わり方は積極的な異文化志向に有意に影響することが分かった。さらに、これらの変数を投入したあとも、positiveな異文化感情は積極的な異文化志向を有意に説明できることが示された。

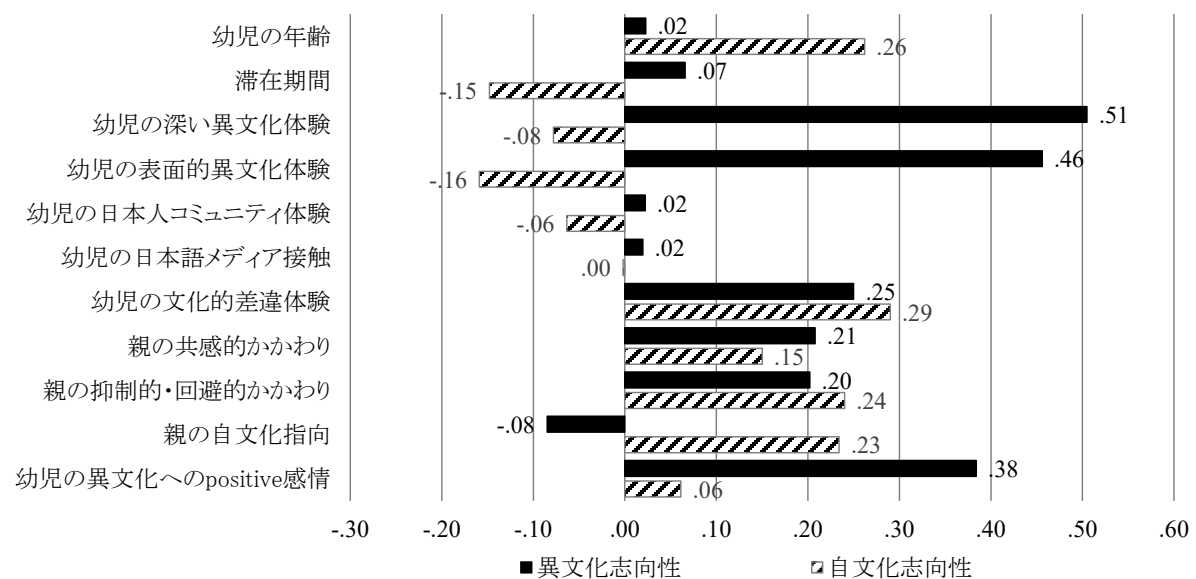


図5 子ども異文化適用と滞在期間、異文化体験、異文化への感情、親の関わり方の相関

考 察

本研究は、バンコクと上海の日本語幼稚園に通う幼児の保護者360名を対象に、幼児の異文化体験と異文化感情、及び保護者の関わり方と幼児の異文化適応に関するデータを収集した。まず幼児の海外暮らしにおける文化的体験には異文化体験が少なく、自文化体験が多いという結果が見出された。当たり前のことだが、異文化体験は年齢にかかわらず滞在期間が長いほど多くなる

表5 幼児の異文化志向を目的変数とする重回帰分析の結果

model 1	$F_{(2, 284)}=0.635, n.s.$		$R^2=.003$	β 係数
	年齢			.003
	滞在期間			.066
model 2	$F_{(7, 279)}=20.702, p<.01$		$R^2=.325$	β 係数
	幼児の年齢			.022
	滞在期間			-.099
	幼児の異文化体験	深い異文化体験	.394	$p<.01$
		表面的異文化体験	.256	$p<.01$
		日本人コミュニティ体!	.001	
		日本語メディア接触	.038	
異文化差違体験	.124	$p<.05$		
model 3	$F_{(10, 276)}=16.071, p<.01$		$R^2=.368$	β 係数
	幼児の年齢			.003
	滞在期間			-.072
	幼児の異文化体験	深い異文化体験	.381	$p<.01$
		表面的異文化体験	.240	$p<.01$
		日本人コミュニティ体!	.002	
		日本語メディア接触	.038	
	異文化差違体験	.085		
	幼児の異文化差違体験時の 親のかかわり方	共感的	.114	$p<.06$
		抑制・回避	.087	
自文化中心		-.125	$p<.05$	
model 4	$F_{(11, 275)}=16.024, p<.01$		$R^2=.391$	β 係数
	幼児の年齢			.001
	滞在期間			-.090
	幼児の異文化体験	深い異文化体験	.360	$p<.01$
		表面的異文化体験	.234	$p<.01$
		日本人コミュニティ体!	.024	
		日本語メディア接触	.033	
	異文化差違体験	.028		
	幼児の異文化差違体験時の 親のかかわり方	共感的	.097	
		抑制・回避	.044	
自文化中心		-.102	$p<.06$	
幼児のpositiveな異文化感情		.180	$p<.01$	

ことも示された。これと関連して、幼児が異文化に対して「違う」という言動を見せることも少なく、幼児の異文化差違体験は多く見積もっても「少ないがある」程度であった。この結果は、帰国を前提とする駐在員の家庭では、幼児を積極的に現地社会に連れ出すことが少ないことを示している。

岡本（2010）は日本における異文化教育を推進する立場から、異文化体験はそのままでは「共に生きる力」にはならないことを指摘する。体験が「共に生きる」ことになるためには、異文化に関わるという出来事を自らが選択し、そこに生じる自文化と異文化の関係性を内省する必要がある。つまり、異文化体験から共生という社会的行為へつなげることが重要なのである。幼児は自らの力では異文化体験を選択することはできない。また、内省的な思考力の制約のため、体験を振り返り、体験から意味を抽象することはできない。幼児は保護者の行動範囲や保護者の認識を通じた解釈や言葉かけに頼らざるを得ない。幼児の異文化体験が少ないということは、駐在員である保護者もしくは配偶者の異文化適応の問題なのかもしれない。この点は今後の研究課題としたい。

幼児は異文化差違体験を示すことも少ないことが報告された。これは、幼児の異文化経験自体が少ないことに加えて、幼児の生活経験の少なさ、及び幼児の認知発達上の制約が関係しているのかもしれない。幼児は他者の行動や社会制度を読み取る社会的認知の発達途上にあり、社会的慣習概念の初期発達には5歳児になって認められるという報告もある（首藤・二宮、2003）。この仮説と一致して、本研究では、年齢差が有意であり、5歳児は3歳児と4歳児よりも異文化差違体

験を多く経験していた。また、幼児の異文化感情は一様にnegativeであった。本研究結果は、滞在期間が長いほど幼児はpositiveな異文化感情を持つようになることも示した。これは、幼児は異文化差違体験を蓄積し、身近な大人との相互作用により、その体験を解釈し意味づけできるようになることを示唆する。しかし、滞在が2年以上の場合、4歳児の異文化感情は3歳児のそれよりも有意にpositiveであるものの、5歳児では4歳児よりも有意にnegativeとなった。小学校就学をひかえた5歳児では、異文化差違体験の意味づけが4歳児までとは異なることが示唆される。

親は、幼児の異文化差違体験時に3種類の関わり方をとることが示された。その中でも、共感的・積極的対応と抑制回避的対応は幼児の年齢と共に強くなった。一方、自文化中心的な対応も、幼児の年齢と滞在期間に関係なく、少くないことも示された。この親の対応は、幼児のnegativeな異文化感情と関連しているのかもしれない。異文化適応に関する分析の結果、幼児は現地文化への積極的な志向性を持つと同時に、自文化志向も強く持っていることが示された。幼児は年齢と共に、また滞在期間の長さと共に、自文化志向ではなくなる傾向が示された。しかし、5歳児では滞在期間と関係なく、一貫して自文化志向が強かった。これは5歳児のnegativeな異文化感情の強さと一致した傾向である。

Oberg (1960) はカルチャーショックを定義する中で、第1段階のハネムーン期（観光旅行での体験のようなもの）、第2段階のショック期（新しい文化に敵対心を持ち、異文化をステレオタイプ的にとらえ、自分と同じ文化に所属する人とのコミュニケーションが増える時期）、第3段階の回復期（言語や環境にも慣れ、次第に文化変容が見られるとき）、第4段階の安定期（異文化適応、新しい文化の受容）と4つの段階を設定した。本研究において5歳児の自文化志向が強く、negativeな異文化感情が強いという結果は、カルチャーショックが一方向に進行するのではなく、就学等の状況に応じて「後戻り」することもあることを示唆している。この幼児の志向性と感情の変化は、異文化状況にしながら日本での生活に不安感をもつという保護者の不安定な感情に左右されると考えた方がよいであろう。

Bennett (1993) は異文化感受性の発達モデルを作成した。これによると、異文化体験は「自文化中心的段階」から「文化相対的段階」に発達する。さらに、自文化中心的段階には「異文化の否定」「異文化からの防衛」「異文化の最小化」の下位段階があり、また文化相対的段階には「異文化の受容」「異文化への適応」「異文化との統合」の下位段階がある。本研究の幼児は、異文化を否定、そこから自己を防衛する自文化中心の段階に位置すると考えられる。親の関わり方は、自文化中心的段階での異文化の最小化から文化相対的段階での異文化の受容を促す傾向にあるといえる。また、向井・渡部 (2006) は20代から80代の男女1193名を対象に「自国と外国への態度尺度」を作成し、異文化受容と愛国心の2因子を抽出できることを示した。本研究の幼児の異文化適応が異文化志向と自文化志向の2つに分かれるという結果も、彼らの知見と一致する。Bennettのモデルが示すように、自文化志向が異文化志向に置き換わるのではなく、この2つの志向性は人の心性として同時に存在するのかもしれない。

本研究の作業仮説と一致して、幼児の積極的な異文化志向には、彼らの異文化体験と親の関わり方が有意に影響していた。さらに、幼児のpositiveな異文化感情は積極的な異文化志向と強く関連していた。幼児は異文化体験を親との関係の中で意味づけし、異文化に対してpositiveな感情を持つようになり、それが幼児の異文化適応を促進することが示唆される。

箕浦(2003)によれば、文化とは建物や服装や食べ物や音楽という物質文明を表す概念ではなく、社会特有の意味体系である。この文化的意味体系には、ものの考え方や振る舞い方を規定する行

動基準、事物に意味を与える社会的合意形成基準、成員に一定の行動をとるように方向づける動機づけ機能、行動や事物から一定の感情を起こさせる情動喚起機能がある。したがって文化は認知—行動—情動システムとして、私たちの心の中に存在することができる。箕浦の考え方は、Turielら（Turiel, 2002; Wainryb, 2006）の認知・社会的構築主義とも一致しており、幼児にとって身近な存在である保護者との相互作用が幼児の異文化理解、多様性の受容、そして異文化適応の重要な発達環境になることを示唆している。今後は、異文化状況下における保護者と子どもの相互作用を分析する必要があるだろう。

結 論

海外滞在家族の幼児の通う日本語幼稚園は、滞在直後から親支援を行い、親子での積極的な異文化体験を促す必要があるだろう。幼稚園教育としては、日本の幼稚園教育要領に示された保育内容の実践に加え、現地の言語の学習、現地の人々との交流を教育内容に加える必要があるだろう。特に言語の習得は現地での生活を広げる働きがある。5歳児のnegativeな異文化感情と自文化中心志向の高さは、就学をひかえての親子の不安感とも関連すると考えられる。帰国の時期が小学校就学時期と一致するとは限らない。日本でも幼児と親の就学不安を低減させるために、幼稚園と小学校との交流を積極的に展開している。日本語幼稚園においても、日本人小学校や現地の小学校の教師、児童との交流を教育課程に位置づけていく必要があるだろう。本研究は、バンコクと上海に焦点を当て、海外駐在員の家庭の幼児における異文化体験と異文化適応に関する調査を実施した。今後は、他の都市の日本語幼稚園も対象にし、さらに面接調査を併用するなどして、親と子の異文化適応のプロセスを丁寧に分析する必要がある。

謝 辞

本調査の実施にあたり、オイスカバンコク日本語幼稚園の武田紀之園長、職員と保護者の皆様にご協力をいただきました。また、オイスカ上海日本語幼稚園の本園、天山分園、東櫻分園の島崎久一園長、職員と保護者の皆様に大変お世話になりました。ここに感謝申し上げます。

文 献

- Bennett, M. J. (1993). Towards a developmental model of intercultural sensitivity In R. Michael Paige (Ed.), *Education for the Intercultural Experience*. Yarmouth, ME: Intercultural Press.
- ビアルケ（當山）千咲（2006）. 生徒の異文化体験と親の教育戦略に関する一考察—ある帰国生のライフ・ストーリーの再構成にもとづいて—教育研究（ICU）, 48, 175-184.
- 外務省（2016）. 海外在留邦人数調査統計（平成28年要約版）外務省領事局政策課
- 花木亨（2008）. 物語が織り成すアイデンティティと文化—アメリカ中西部の大学院における異文化体験についての民族誌的省察—, *Human Communication Studies*（日本コミュニケーション学会）, 36, 51-72.
- 原 和子（1993）. 異文化体験のライフコース分析—「かつての帰国子女」の追跡調査—第一部報告, 教育研究（ICU）, 35, 155-172.
- 原 和子（1998）. 異文化体験のライフコース分析—「かつての帰国子女」の追跡調査—第二部報告, 教育研究（ICU）, 40, 195-232.
- 泉水清志・小池庸生（2012）. 異文化接触が異文化受容態度と友人関係に及ぼす影響, 育英短期大学研究紀要, 29, 25-41.

- 北端辰昭 (2007). 異文化接触の研究 (その1) —イスラム社会・インドネシアにおける駐在体験と調査結果から—, 佛教大学大学院紀要, 35, 127-141.
- 丸井ふみ子 (2012). アイデンティティ研究の動向—異文化接触・言語との関係を中心に—, 言語・地域文化研究, 18, 193-2009.
- 箕浦康子 (2003). 増補改訂版 子供の異文化体験—人格形成過程の心理人類学的研究, 新曜社.
- 森下規代子 (2008). ベトナム日本人学校 調査報告, 大阪総合保育大学紀要, 3, 157-167.
- 向井有理子・渡部美穂子 (2006). 異文化受容態度: 日・独・英の比較, 向井有理子・渡部美穂子 (編) 比較文化研究—日本・ドイツ・イギリス—都市文化研究センター.
- 中村俊哉・慎 栄根・平 直樹・川本ひとみ・横山恭子・高田夏子 (1994). 在日朝鮮人学校の中学生の異文化接触体験, 教育心理学研究, 42, 291-297.
- 中柴春乃 (1997). 在日ネパール人の異文化体験—自己認識・他者認識の関係性を中心に—, 東京大学大学院教育学研究科紀要, 37, 155-164.
- 沼田 潤 (2012). 日本人大学生における異文化理解の現状, 人間環境学研究, 10(2), 55-63.
- Oberg, K. (1960). *Cultural shock: Adjustment to new cultural environments*. Practical Anthropology, 7, 177-182.
- 岡本智周 (2010). 異文化体験から共生という社会的行為へ, 教員研修, 2010, 1, 112-115.
- 奥村圭子 (2005). 異文化コミュニケーション教育における内省の活性化, 留学生センター紀要(山梨大学), 1, 17-29.
- 大西晶子 (2001). 異文化間接触に関する心理学的研究についてのレビュー, 東京大学大学院教育学研究科紀要, 41, 301-310.
- 佐藤郡衛 (1991). 子どもの異文化体験—現地校に通う子どもの異文化体験—, 青少年問題, 38(5), 14-21.
- 首藤敏元・二宮克美 (2003). 子どもの道徳的自律の発達 風間書房.
- 鶴田洋子・小川捷之 (1985). 異文化体験による日本人的心性の変容に関する研究—主に対人不安意識をめぐって—, 横浜国立大学教育紀要, 23, 163-186.
- Turiel, E. (2002). *The culture of morality: Social development, context, and conflict*. New York: Cambridge university press.
- 植松晃子 (2010). 異文化環境における民族アイデンティティの役割—集団アイデンティティと自我アイデンティティの関係, パーソナリティ研究, 19(1), 25-37.
- Wainryb, C. (2006). Moral development in culture: Diversity, tolerance, and justice. In M. Killen & J. G. Smetana (Eds.), *Handbook of moral development*. Mahwah, NJ: Erlbaum, 211-240.
- 山本雅美 (2001). 異文化体験の影響に対する心理力動的接近の可能性, 広島大学大学院教育学研究科紀要 (第三部), 50, 509-515.

(2017年 9 月15日提出)

(2017年11月18日受理)

Experience and Adjustment to Different Culture in Children Attending Japanese Kindergartens in Asian Countries

Shuto, Toshimoto

Faculty of Education, Saitama University

Kondo, Akane

Faculty of Education, Saitama University

Itaba, Mina

Machida College of Child & Social Welfare

Abstract

Recently, the number of overseas resident businesspeople from Japan in Asian countries has been increasing. This study aims to examine methods to support childcare in families of such businesspeople and collect basic data for planning the content of education at Japanese kindergartens. A questionnaire survey was conducted with parents rearing young children (N = 360, 211 boys and 149 girls, mean age, 4 years and 10 months) attending Japanese kindergartens in Bangkok and Shanghai. The questionnaire included the following items: children's experiences of different cultures, their feelings toward different cultures, and their cultural adaptation from the perspective of parents, as well as the types of parents' involvement when children experienced cultural differences. The results indicated the following. Regardless of age, children did not have deep intercultural contacts, whereas they had shallow intercultural experiences such as having a meal at restaurants where local people gathered. On the other hand, they had many contacts with places and things related to Japanese people and Japanese language. These tendencies became weaker as the length of stay became longer. Furthermore, children felt cultural differences in languages, meals, life habits, and atmosphere of the cities. Such feelings were negative in general, though negative feelings became weaker as the length of stay became longer, except in the case of five-year-old children. Children's positive orientation toward different cultures, which shows adaptation to different cultures, became significantly stronger as they have more intercultural experiences and their positive feelings toward different cultures became stronger. In five-year-old children, the length of stay was related to low adaptation to different cultures. The above results suggest that it would be important to provide educational support for children so that they could have positive intercultural contacts at Japanese kindergartens and in their homes, and they could recognize experiences of cultural differences positively. Furthermore, difficulties in education of five-year-old children in foreign cultures were also suggested. It would be important to establish cooperative systems between Japanese kindergartens and Japanese elementary schools, and between Japanese kindergartens and local kindergartens as well as local elementary schools.

Keywords: Japanese kindergarten, intercultural experiences, adaptation to different cultures, feelings toward cultural differences

付 録

APPENDIX A 日常の文化的体験の度数 (上海)

質問「お子様の日常生活について伺います。次の①～⑯の事柄をどの程度経験していますか。」

	全くない	あまりない	少ないがある	時々ある	よくある	毎日ある
①現地の人が通うスーパーマーケットに行く。	24 (8.1)	59 (20.0)	70 (23.7)	75 (25.4)	61 (20.7)	4 (1.4)
②現地の人の集まるレストランで食事をする。	15 (1.5)	40 (13.6)	68 (23.1)	86 (29.2)	83 (28.1)	2 (0.7)
③現地の人の集まる公園に行く。	27 (9.2)	58 (19.7)	55 (18.6)	72 (24.4)	70 (23.7)	12 (4.1)
④現地の遊園地などのレジャー施設に行く。	25 (8.5)	92 (31.2)	78 (26.4)	63 (21.4)	32 (10.8)	5 (1.7)
⑤現地で知り合った現地の人の家に行く。	208 (70.5)	37 (12.5)	22 (7.5)	16 (5.4)	12 (4.1)	0 (0.0)
⑥現地の子どもと一緒に遊ぶ。	102 (34.6)	103 (34.9)	39 (13.2)	28 (9.5)	18 (6.1)	4 (1.4)
⑦現地の電車やバスに乗る。	9 (3.1)	35 (11.9)	50 (16.9)	93 (31.5)	96 (32.5)	12 (4.1)
⑧現地の子どもも通う習いごとに行く。	181 (61.4)	24 (8.1)	27 (9.2)	26 (8.8)	31 (10.5)	5 (1.7)
⑨自宅で現地のテレビ番組を見る。	172 (58.3)	55 (18.6)	27 (9.2)	20 (6.8)	13 (4.4)	8 (2.7)
⑩現地の言葉で書かれた本や絵本を読む。	150 (50.8)	75 (25.4)	32 (10.8)	20 (6.8)	13 (4.4)	5 (1.7)
⑪現地の言葉で会話をする	70 (23.7)	105 (35.6)	58 (19.7)	21 (7.1)	17 (5.8)	23 (7.8)
⑫日本人が多く利用するスーパーマーケットに行く。	2 (0.7)	3 (1.0)	17 (5.8)	71 (24.1)	171 (58.0)	30 (10.2)
⑬日本人が多く利用するレストランで食事をする。	3 (1.0)	1 (0.3)	12 (4.1)	94 (31.9)	174 (59.0)	10 (3.4)
⑭日本人の集まる会合やパーティーに出る。	53 (18.0)	66 (22.4)	58 (19.7)	70 (23.7)	45 (15.3)	2 (0.7)
⑮日本のアニメのビデオやDVDを見る(タブレット端末を含む)。	1 (0.3)	5 (1.7)	6 (1.0)	34 (11.5)	125 (42.4)	127 (43.1)
⑯日本語の本や絵本を読む(タブレット端末を含む)。	1 (0.3)	0 (0.0)	2 (0.7)	16 (5.4)	102 (34.6)	170 (57.6)
⑰家族で現地の観光地を訪れる。	2 (0.7)	37 (12.5)	62 (21.0)	129 (43.7)	60 (20.3)	3 (1.0)
⑱日本にいる友達や家族・親戚に電話する。	7 (2.4)	35 (11.9)	42 (14.2)	124 (42.0)	75 (25.4)	12 (4.1)

※未記入による欠損値があるため、全体数は一致しない。また割合の合計は100にならないこともある。

APPENDIX B 日常の文化的体験の度数 (バンコク)

質問「お子様の日常生活について伺います。次の①～⑯の事柄をどの程度経験していますか。」

	全くない	あまりない	少ないがある	時々ある	よくある	毎日ある
①現地の人が通うスーパーマーケットに行く。	3 (4.3)	9 (13.0)	7 (10.1)	27 (39.1)	21 (30.4)	2 (2.9)
②現地の人の集まるレストランで食事をする。	2 (2.9)	14 (20.3)	10 (14.5)	29 (42.0)	14 (20.3)	0 (0.0)
③現地の人の集まる公園に行く。	3 (4.3)	17 (24.6)	16 (23.2)	18 (26.1)	14 (20.3)	0 (0.0)
④現地の遊園地などのレジャー施設に行く。	3 (4.3)	17 (24.6)	23 (33.3)	21 (30.4)	5 (7.2)	0 (0.0)
⑤現地で知り合った現地の人の家に行く。	51 (73.9)	9 (13.0)	4 (5.8)	3 (4.3)	2 (2.9)	0 (0.0)
⑥現地の子どもと一緒に遊ぶ。	37 (53.6)	18 (26.1)	5 (7.2)	6 (8.7)	3 (4.3)	0 (0.0)
⑦現地の電車やバスに乗る。	1 (1.4)	9 (13.0)	7 (10.1)	25 (36.2)	23 (33.3)	4 (5.8)
⑧現地の子どもも通う習いごとに行く。	58 (84.1)	4 (5.8)	2 (2.9)	1 (1.4)	3 (4.3)	0 (0.0)
⑨自宅で現地のテレビ番組を見る。	29 (42.0)	17 (24.6)	8 (11.6)	9 (13.0)	3 (4.3)	2 (2.9)
⑩現地の言葉で書かれた本や絵本を読む。	41 (59.4)	17 (24.6)	5 (7.2)	4 (5.8)	2 (2.9)	0 (0.0)
⑪現地の言葉で会話をする	11 (15.9)	20 (29.0)	19 (27.5)	9 (13.0)	4 (5.8)	6 (8.7)
⑫日本人が多く利用するスーパーマーケットに行く。	0 (0.0)	2 (2.9)	1 (1.4)	16 (23.2)	45 (65.2)	5 (7.2)
⑬日本人が多く利用するレストランで食事をする。	0 (0.0)	2 (2.9)	1 (1.4)	22 (31.9)	41 (59.4)	3 (4.3)
⑭日本人の集まる会合やパーティーに出る。	10 (14.5)	21 (30.4)	15 (21.7)	17 (24.6)	5 (7.2)	0 (0.0)
⑮日本のアニメのビデオやDVDを見る(タブレット端末を含む)	1 (1.4)	2 (2.9)	4 (5.8)	8 (11.6)	28 (40.6)	26 (37.7)
⑯日本語の本や絵本を読む(タブレット端末を含む)。	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	2 (2.9)	25 (36.2)	42 (60.9)
⑰家族で現地の観光地を訪れる。	0 (0.0)	4 (5.8)	7 (10.1)	40 (58.0)	16 (23.2)	2 (2.9)
⑱日本にいる友達や家族・親戚に電話する。	1 (1.4)	8 (11.6)	16 (23.2)	18 (26.1)	22 (31.9)	4 (5.8)

※未記入による欠損値があるため、全体数は一致しない。また割合の合計は100にならないこともある。

APPENDIX C 子どもの異文化差違体験 (上海)

質問「現地での生活の中で、お子様が日本で生活や日本人と「違う」という言動を見せたことがありますか。」

	全くない	あまりない	少ないがある	ときどきある	よくある	毎日ある
①現地の言葉や文字	37 (12.5)	43 (14.6)	47 (15.9)	76 (25.8)	70 (23.7)	21 (7.1)
②現地の食事の内容や食材	69 (23.4)	66 (22.4)	47 (15.9)	57 (19.3)	50 (16.9)	3 (1.0)
③現地の人の外見(肌の色や服装)	126 (42.7)	71 (24.1)	44 (14.9)	31 (10.5)	21 (7.1)	0 (0.0)
④現地の人の習慣	72 (24.4)	55 (18.6)	53 (18.0)	67 (22.7)	43 (14.6)	3 (1.0)
⑤現地の人の生活の様子	78 (26.4)	70 (23.7)	54 (18.3)	59 (20.0)	30 (10.2)	2 (0.7)
⑥現地の自然環境	74 (25.1)	60 (20.3)	56 (19.0)	54 (18.3)	42 (14.2)	8 (2.7)
⑦現地の街の様子(ビルや家)	68 (23.1)	68 (23.1)	51 (17.3)	68 (23.1)	34 (11.5)	4 (1.4)
⑧現地の街の匂いや音	48 (16.3)	43 (14.6)	52 (17.6)	76 (25.8)	65 (22.0)	10 (3.4)
⑨現地の交通手段	77 (26.1)	49 (16.6)	41 (13.9)	70 (23.7)	49 (16.6)	7 (2.4)
⑩現地の音楽	145 (49.2)	74 (25.1)	44 (14.9)	24 (8.1)	6 (2.0)	0 (0.0)

※未記入による欠損値があるため、全体数は一致しない。また割合の合計は100にならないこともある。

APPENDIX D 子どもの異文化差違体験 (バンコク)

質問「現地での生活の中で、お子様が日本で生活や日本人と「違う」という言動を見せたことがありますか。」

	全くない	あまりない	少ないがある	ときどきある	よくある	毎日ある
①現地の言葉や文字	6 (8.7)	10 (14.5)	16 (23.2)	13 (18.8)	18 (26.1)	2 (2.9)
②現地の食事の内容や食材	13 (18.8)	11 (15.9)	9 (13.0)	16 (23.2)	13 (18.8)	3 (4.3)
③現地の人の外見(肌の色や服装)	26 (37.7)	15 (21.7)	8 (11.6)	8 (11.6)	5 (7.2)	3 (4.3)
④現地の人の習慣	18 (26.1)	21 (30.4)	8 (11.6)	11 (15.9)	5 (7.2)	1 (1.4)
⑤現地の人の生活の様子	17 (24.6)	25 (36.2)	8 (11.6)	10 (14.5)	2 (2.9)	2 (2.9)
⑥現地の自然環境	14 (20.3)	17 (24.6)	14 (20.3)	12 (17.4)	5 (7.2)	1 (1.4)
⑦現地の街の様子(ビルや家)	17 (24.6)	10 (14.5)	14 (20.3)	11 (15.9)	9 (13.0)	3 (4.3)
⑧現地の街の匂いや音	10 (14.5)	5 (7.2)	11 (15.9)	21 (30.4)	13 (18.8)	5 (7.2)
⑨現地の交通手段	14 (20.3)	10 (14.5)	11 (15.9)	12 (17.4)	12 (17.4)	4 (5.8)
⑩現地の音楽	36 (52.2)	12 (17.4)	7 (10.1)	7 (10.1)	1 (1.4)	1 (1.4)

※未記入による欠損値があるため、全体数は一致しない。また割合の合計は100にならないこともある。

APPENDIX E 子どもの異文化感情 (上海)

質問「上記の続きです。お子様の『違う』という言動は、プラス(すごい、かっこいい、かわいい等)、マイナス(きたない、イヤだ、日本の方がいい等)のどちらが多いと感じですか。」

	「違い」 を見せ たこと はない	マイナス がほとん ど	どちらか という マイナス が多い	両方同 じくらい	どちらか という プラスが 多い	どちらか という プラスが ほとんど
①現地の言葉や文字	59 (20.0)	5 (1.7)	36 (12.2)	124 (42.0)	40 (13.6)	24 (8.1)
②現地の食事の内容や食材	65 (22.0)	21 (7.1)	88 (29.8)	83 (28.1)	28 (9.5)	5 (1.7)
③現地の人の外見(肌の色や服装)	122 (41.4)	7 (2.4)	50 (16.9)	91 (30.8)	13 (4.4)	3 (1.0)
④現地の人の習慣	62 (21.0)	51 (17.3)	105 (35.6)	65 (22.0)	6 (2.0)	1 (0.3)
⑤現地の人の生活の様子	81 (27.5)	33 (11.2)	80 (27.1)	87 (29.5)	8 (2.7)	1 (0.3)
⑥現地の自然環境	66 (22.4)	51 (17.3)	99 (33.6)	65 (22.0)	8 (2.7)	1 (0.3)
⑦現地の街の様子(ビルや家)	67 (22.7)	27 (9.2)	65 (22.0)	100 (33.9)	26 (8.8)	4 (1.4)
⑧現地の街の匂いや音	39 (13.2)	118 (40.0)	94 (31.9)	34 (11.5)	4 (1.4)	1 (0.3)
⑨現地の交通手段	70 (23.7)	34 (11.5)	58 (19.7)	101 (34.2)	21 (7.1)	4 (1.4)
⑩現地の音楽	143 (48.5)	5 (1.7)	12 (4.1)	102 (34.6)	25 (8.5)	2 (0.7)

※未記入による欠損値があるため、全体数は一致しない。また割合の合計は100にならないこともある。

APPENDIX F 子どもの異文化感情 (バンコク)

質問「上記の続きです。お子様の『違う』という言動は、プラス(すごい、カッコいい、かわいい等)、マイナス(きたない、イヤだ、日本の方がいい等)のどちらが多いとお感じですか。」

	「違い」 を見せ たこと はない	マイナス がほとん ど	どちらか という マイナス が多い	両方同 じくらい	どちらか という プラスが 多い	どちらか という プラスが ほとんど
①現地の言葉や文字	15 (21.7)	2 (2.9)	2 (2.9)	26 (37.7)	13 (18.8)	5 (7.2)
②現地の食事の内容や食材	13 (18.8)	7 (10.1)	19 (27.5)	15 (21.7)	7 (10.1)	2 (2.9)
③現地の人の外見(肌の色や服装)	25 (36.2)	1 (1.4)	5 (7.2)	24 (34.8)	6 (8.7)	2 (2.9)
④現地の人の習慣	19 (27.5)	0 (0.0)	7 (10.1)	28 (40.6)	6 (8.7)	1 (1.4)
⑤現地の人の生活の様子	19 (27.5)	1 (1.4)	10 (14.5)	28 (40.6)	2 (2.9)	1 (1.4)
⑥現地の自然環境	13 (18.8)	5 (7.2)	16 (23.2)	21 (30.4)	6 (8.7)	2 (2.9)
⑦現地の街の様子(ビルや家)	17 (24.6)	8 (11.6)	16 (23.2)	18 (26.1)	3 (4.3)	1 (1.4)
⑧現地の街の匂いや音	9 (13.0)	23 (33.3)	18 (26.1)	12 (17.4)	1 (1.4)	1 (1.4)
⑨現地の交通手段	14 (20.3)	2 (2.9)	9 (13.0)	23 (33.3)	11 (15.9)	4 (5.8)
⑩現地の音楽	37 (53.6)	1 (1.4)	4 (5.8)	16 (23.2)	4 (5.8)	1 (1.4)

※未記入による欠損値があるため、全体数は一致しない。また割合の合計は100にならないこともある。

APPENDIX G 子どもの異文化差違体験時の親の関わり方 (上海)

質問「お子様の『違う』という言動に対して、あなたはどのようにかわりましたか。」

	全くない	あまりない	少ないがある	ときどきある	よくある	いつもそうだ
①「すごいね」「不思議だね」というプラス反応を見せる。	21 (7.1)	23 (7.8)	52 (17.6)	100 (33.9)	60 (20.3)	20 (6.8)
②お子様が「違う」と反応する事柄に積極的な関心を示す。	22 (7.5)	40 (13.6)	63 (21.4)	72 (24.4)	63 (21.4)	15 (5.1)
③「違う国だから違って当然」という主旨の言葉かけをする。	45 (15.3)	32 (10.8)	30 (10.2)	73 (24.7)	77 (26.1)	20 (6.8)
④「気にしないように」という主旨の言葉かけをする。	62 (21.0)	59 (20.0)	53 (18.0)	65 (22.0)	30 (10.2)	6 (2.0)
⑤「変だね」「イヤだね」というマイナスの反応を見せる。	69 (23.4)	71 (24.1)	62 (21.0)	59 (20.0)	17 (5.8)	1 (0.3)
⑥お子様が「違う」と反応する事柄から避けようとする。	170 (57.6)	72 (24.4)	14 (4.7)	15 (5.1)	5 (1.7)	0 (0.0)
⑦「早く慣れるといいね」という主旨の言葉をかける。	110 (37.3)	68 (23.1)	36 (12.2)	42 (14.2)	17 (5.8)	2 (0.7)
⑧我慢するように言う。	94 (31.9)	93 (31.5)	31 (10.5)	45 (15.3)	9 (3.1)	3 (1.0)
⑨お子様が「違う」と反応する事柄の歴史的、地理的、文化的意味を教える。	75 (25.4)	59 (20.0)	50 (16.9)	56 (19.0)	24 (8.1)	8 (2.7)
⑩お子様が「違う」と反応する事柄を自分たちもTRYしてみる(食べてみる、同じ行動をしてる、同じような服を着てみる等)	116 (39.3)	76 (25.8)	30 (10.2)	36 (12.2)	15 (5.1)	4 (1.4)
⑪「日本でも同じことがある」という主旨の言葉をかける。	52 (17.6)	58 (19.7)	67 (22.7)	62 (21.0)	34 (11.5)	4 (1.4)
⑫「日本(人)はいいね」という主旨の発言をする。	59 (20.0)	79 (26.8)	49 (16.6)	61 (20.7)	28 (9.5)	1 (0.3)

※未記入による欠損値があるため、全体数は一致しない。また割合の合計は100にならないこともある。

APPENDIX H 子どもの異文化差違体験時の親の関わり方 (バンコク)

質問「お子様の『違う』という言動に対して、あなたはどのようにかわりましたか。」

	全くない	あまりない	少ないがある	ときどきある	よくある	いつもそうだ
①「すごいね」「不思議だね」というプラス反応を見せる。	5 (7.2)	6 (8.7)	7 (10.1)	14 (20.3)	16 (23.2)	9 (13.0)
②お子様が「違う」と反応する事柄に積極的な関心を示す。	7 (10.1)	6 (8.7)	8 (11.6)	14 (20.3)	17 (24.6)	4 (5.8)
③「違う国だから違って当然」という主旨の言葉かけをする。	12 (17.4)	6 (8.7)	6 (8.7)	13 (18.8)	9 (13.0)	10 (14.5)
④「気にしないように」という主旨の言葉かけをする。	21 (30.4)	13 (18.8)	7 (10.1)	12 (17.4)	4 (5.8)	0 (0.0)
⑤「変だね」「イヤだね」というマイナスの反応を見せる。	27 (39.1)	17 (24.6)	6 (8.7)	8 (11.6)	0 (0.0)	0 (0.0)
⑥お子様が「違う」と反応する事柄から避けようとする。	43 (62.3)	9 (13.0)	2 (2.9)	1 (1.4)	0 (0.0)	0 (0.0)
⑦「早く慣れるといいね」という主旨の言葉をかける。	21 (30.4)	16 (23.2)	6 (8.7)	6 (8.7)	6 (8.7)	1 (1.4)
⑧我慢するように言う。	27 (39.1)	19 (27.5)	7 (10.1)	3 (4.3)	0 (0.0)	0 (0.0)
⑨お子様が「違う」と反応する事柄の歴史的、地理的、文化的意味を教える。	16 (23.2)	12 (17.4)	5 (7.2)	16 (23.2)	6 (8.7)	2 (2.9)
⑩お子様が「違う」と反応する事柄を自分たちもTRYしてみる(食べてみる、同じ行動をしてる、同じような服を着てみる等)	12 (17.4)	16 (23.2)	7 (10.1)	13 (18.8)	6 (8.7)	1 (1.4)
⑪「日本でも同じことがある」という主旨の言葉をかける。	10 (14.5)	13 (18.8)	12 (17.4)	14 (20.3)	5 (7.2)	2 (2.9)
⑫「日本(人)はいいね」という主旨の発言をする。	15 (21.7)	21 (30.4)	10 (14.5)	7 (10.1)	3 (4.3)	1 (1.4)

※未記入による欠損値があるため、全体数は一致しない。また割合の合計は100にならないこともある。

PPENDIX I 子どもの異文化適応 (上海)

質問「お子様の最近の様子について伺います。次の①～⑬について、どの程度当てはまりますか。」

	全く当てはまらない	どちらかといえば当てはまらない	どちらともいえない	どちらかといえば当てはまる	よく当てはまる
①幼稚園に喜んでいく。	1 (0.3)	4 (1.4)	17 (5.8)	69 (23.4)	203 (68.8)
②現地の言葉(会話)に興味をもつ。	13 (4.4)	28 (9.5)	68 (23.1)	118 (40.0)	68 (23.1)
③現地の文字に興味をもつ。	71 (24.1)	59 (20.0)	112 (38.0)	32 (10.8)	20 (6.8)
④現地の子どもの遊びに関心を示す。	55 (18.6)	58 (19.7)	91 (30.8)	62 (21.0)	28 (9.5)
⑤現地のテレビ番組を見たがる。	168 (56.9)	63 (21.4)	34 (11.5)	13 (4.4)	15 (5.1)
⑥現地の食べ物に興味を示す。	74 (25.1)	81 (27.5)	64 (21.7)	53 (18.0)	21 (7.1)
⑦現地のいろいろな場所に行きたがる。	66 (22.4)	65 (22.0)	78 (26.4)	60 (20.3)	24 (8.1)
⑧現地のことをいろいろ質問する。	73 (24.7)	72 (24.4)	63 (21.4)	67 (22.7)	18 (6.1)
⑨家族から現地で仕事や現地の人のことを聞きたがる。	107 (36.3)	92 (31.2)	60 (20.3)	23 (7.8)	9 (3.1)
⑩現地の子どもを友達にもちたがる。	156 (52.9)	65 (22.0)	48 (16.3)	14 (4.7)	10 (3.4)
⑪この地に住んでいることを自慢したがる。	153 (51.9)	53 (18.0)	72 (24.4)	13 (4.4)	2 (0.7)
⑫屋外に出たがらない。	189 (64.1)	49 (16.6)	35 (11.9)	16 (5.4)	4 (1.4)
⑬「日本に帰りたい」「日本はよかった」と言う。	106 (35.9)	58 (19.7)	43 (14.6)	63 (21.4)	23 (7.8)

※未記入による欠損値があるため、全体数は一致しない。また割合の合計は100にならないこともある。

APPENDIX J 子どもの異文化適応 (バンコク)

質問「お子様の最近の様子について伺います。次の①～⑬について、どの程度当てはまりますか。」

	全く当てはまらない	どちらかといえば当てはまらない	どちらともいえない	どちらかといえば当てはまる	よく当てはまる
①幼稚園に喜んでいく。	0 (0.0)	2 (2.9)	7 (10.1)	15 (21.7)	45 (65.2)
②現地の言葉(会話)に興味をもつ。	2 (2.9)	7 (10.1)	17 (24.6)	30 (43.5)	13 (18.8)
③現地の文字に興味をもつ。	30 (43.5)	13 (18.8)	12 (17.4)	8 (11.6)	5 (7.2)
④現地の子どもの遊びに関心を示す。	25 (36.2)	19 (27.5)	14 (20.3)	9 (13.0)	1 (1.4)
⑤現地のテレビ番組を見たがる。	39 (56.5)	14 (20.3)	8 (11.6)	7 (10.1)	1 (1.4)
⑥現地の食べ物に興味を示す。	12 (17.4)	12 (17.4)	23 (33.3)	17 (24.6)	4 (5.8)
⑦現地のいろいろな場所に行きたがる。	11 (15.9)	8 (11.6)	21 (30.4)	18 (26.1)	10 (14.5)
⑧現地のことをいろいろ質問する。	15 (21.7)	11 (15.9)	21 (30.4)	14 (20.3)	7 (10.1)
⑨家族から現地で仕事や現地の人のことを聞きたがる。	25 (36.2)	19 (27.5)	14 (20.3)	7 (10.1)	2 (2.9)
⑩現地の子どもを友達にもちたがる。	44 (63.8)	11 (15.9)	10 (14.5)	2 (2.9)	0 (0.0)
⑪この地に住んでいることを自慢したがる。	41 (59.4)	6 (8.7)	12 (17.4)	5 (7.2)	3 (4.3)
⑫屋外に出たがらない。	40 (58.0)	15 (21.7)	10 (14.5)	1 (1.4)	0 (0.0)
⑬「日本に帰りたい」「日本はよかった」と言う。	21 (30.4)	8 (11.6)	15 (21.7)	17 (24.6)	6 (8.7)

※未記入による欠損値があるため、全体数は一致しない。また割合の合計は100にならないこともある。